

海外で感じたこと

—これからの幼児教育に望みたいこと

黒田成子



ちょうど、一九六七年度の夏、私は、欧米を訪ずねる機会を持った。そこで、各所をまわっているあいだに感じたことを記しながら、「これからの幼児教育に望みたいこと」を考えてみようと思う。

私が参加した団体は、私立大学の海外研修団という名称であったが（団員一五名）、一か月余の間に十何か国も見歩くので、形ばかりの大学訪問と観光が主になってしまった。しかしその間、ヘルシンキとベルリンとロンドンにおいて、二、三の幼児教育施設と「未婚の母たち」の子どものための施設を見ることができた。

ちょっとした手違いから、前もって紹介されていたモスクワの幼稚園を見そこなった私は、不満でいっぱいであった。そのため、

ヘルシンキに着くと観光より、まずはどこかに保育園がないものかと考えた。ホテルの周辺に団地が多いのを見て、多分何かの施設があるに違いないと思い、子どもたちに会いたい一念で歩きまわっているうちに近くの保育園を探しあてた。

それはまるで普通のアパートのような建物であって、通り過ぎようとする窓ガラスに子どものペインティングが貼ってあり、ふと、足を止めてドアの上にあるハッキリしない文字を見ると、LASTENTARHAとあり、たしかに子どもの施設であった。幸い若い女の先生が現われて明朝の見学を約束することができた。

ところが次の日になると、同じグループの大学の先生方八名が、ぜひ一緒に見たいということで私どもの見学に加わってきた。日本の幼稚園さえ見たことのない教授方がいろいろ質問する

ので、私は自分の訊ねたいことも棚上げして通訳のようなことになつてしまつた。

働く親たちは、朝の八時から夕方五時半まで子どもたちをあずけていく。ここでは朝食をとることから一日の園生活が始まる。建物は外見よりはずっと奥行があり、四〜六歳児組、二歳半〜四歳児組、バス・ルーム、昼寝をとる部屋、材料室などが二階にある。階下には六か月から二歳半までの部屋が二つと遊戯室、バス・ルーム、調理室、などがある。若い保母たちはいずれも夏休みなので、他の園から、午前、午後などと時間を区切って交替に働きに来ている者もいた。

夏休み中とはいえ、七名の二歳児に保母と助手が一人ついていた。九月からは人数がふえるとのことだが、この施設全体で五〇名程度である。こうした暖かい家庭的な小規模の環境では、ホールや大運動場をもつた日本の施設のような大世帯は想像することもできないだろう。

帰る前に、見学グループの一人が最年長の先生に、「子どもにとつてもっとも大切なことは何ですか」と聞くと、彼女は大きな体のゆたかな胸をはって、夢中に遊んでいる子どもたちの方へ両手をさしのべるような仕草をして、*play* とひとこと叫び、つ

づいて肩をそびやかすようにして、*“sleeping, singing”*とゆっくり単語を並べた。(英語を話すのは苦手なようだった) そのいい方はいかにも愛する子らのために、もっとも大切なものは「遊び」にきまっているじゃありませんか。——それに、寝ること、歌うこと、こうしたことは当然子どもたちの生活にすでにあるもの、必要なものですよといっているかのようであった。その瞬間私の心には何か共感として伝わってくるものがあつた。

町角にあるごく普通の保育園にいた、とりたてていうほどの特長もない一人の中年の先生のこの素朴な言葉の中に私は、はからずも幼児教育の真髄を見る思いがしたのである。

愛泉寮のキェクリッ先生のご紹介で見学したベルリンの幼稚園は、個人の大きな家屋敷を幼稚園に仕立てたような感じのものであつた。庭は緑の樹々に囲まれて閑静であつた。ヨーロッパの各地では、この式の幼児教育施設が普通のものである。ここも共働きの父母たちを持つ夏休み中の子どもたちが、全員で約三〇名ほど来ていた。もっとも大きい組は六、七歳児で背の高い子どもなど私の肩にとどきそうであつた。次の組は、四、五歳児、そして三歳児と三組に分かれていた。

大きい組の子どもたちは歌いながらするゲームを始めていた。

この歌はさまざまな動物の音が間に入り、なかなかおもしろそう
で一時間近くも椅子に坐ったままでやっていた。何げなく歌う子
どもたちの歌声は実に澄んで美しく、しかも、く、に、歌っていて
素晴らしかった。やはり家庭、学校、教師などから受け継ぐ声の
質、発声法、ハーモニーとリズム感、音楽に対する親しみと理解な
ど自然の生活環境によるものが大きいだろうと羨ましく思った。

しかし、保育中に子どもがふぎけて乱れてくると先生は厳しく
叱り、子どもはその時はしよげていた。子どもたちが、年齢相応
に互いに規正し合う集団的な働きはあまり見られず、個々の子ど
もが教師につながっている感じであった。

私どもを案内した先生は、自分の幼稚園は夏期休暇なので自分
はその間だけ、この幼稚園にアルバイトに來ていること、自分は
一年ほど英国へ留学したことがあり、幼児教育はもっと高いレベ
ルのものであることを知っているが、現実の問題はたとえば、有
資格者が少ないこと、給与のこと、教育方法のこと、給食や設備
のことなどいろいろあって、なかなかむずかしい。しかし次の機
会には、ベルリンにある最も進歩した幼稚園を是非見に來てほし
いといっていた。

ロンドン大学に隣接した有名なコラム・デー・ナーセリーへ

は日本のK博士の紹介で訪問をした。ここは全部の保育室が園庭
にすぐ出られるようになっていた。大きな建物で、園舎の内外とも
設備がよく整っていた。ここで子どもたちは、八月下旬の澄んだ
冷たい空気の中で、午前中いっぱい遊びつづけていた。同じ園の
中に精神薄弱児たちのための保育室があり、九名の子どもが遊ん
でいた。普通児たちと園庭は共同であるが、どうしても遊びは分
かれてしまうということであった。

二階は Thomas Coram Foundation for Children という名称
のもとに、階下のナーセリーとは別個の団体で、未婚の母親たち
の子どものためのレジデンスとなっている。主事のミス・トムキ
ンソンは色調の美しい、設備や小道具までよく整った寝室、遊戯
室、食堂、調理室、浴室、洗濯場等を案内して下さる。一人の保母
に五人の子どもが一族として構成され、生活を共にしている。

主事は子どもたち一人一人のことや、未婚の母親たちの問題に
ついて熱心に話して下さる。時には子どもを捨てて行方をくらま
したり、あるいはこういう団体を悪く利用したりする者もいるが、
あくまでも彼女たちが再起して新しい生きがいを見出せるため相
談や指導をし、時には結婚の斡旋をすることもあるそうである。

子どもについてはできれば生母とともに、あるいはそれが不可

能な場合はもっとも適した義父母のいる家庭を探してやるということであった。そのため大きな組織のもとに多くの職員や保母たちが一人一人の子どもの幸せを願って、異常なまでの熱心さをもって励んでいる事実を知って心打たれた。

私は海外へたとえ一か月間でもいけば、最近盛んにいわれている幼児教育を科学的方法でとらえるということについて、何か見聞きするだろうと、漠然とある期待をもっていた。しかし、特に意図した視察旅行ではないので、幸か不幸か、このたび見学した施設は三か所とも、保育の中心軸として自由遊びを持っていて、それを当然としているところであった。大半の施設の気風がこのようなものであらうと察せられた。

私はあらためてリラックスした気持で彼らの自由遊びを見た。何にも煩わされないで、自分たちのペースでゆっくりと遊びに浸り切っている子どもたちを、また私自身も何にも煩わされないで（責任ある立場から離れて）、ゆっくり見ることができた。そこに私は子どもたち一人一人が、彼らなりの人間として、精一杯に生きている姿を見る思いであった。遊びを見守っている保母や先生たちも、子どものペースを尊重してやることがよくうかがわれた。と同時に食事をする時のマナーなどきちんとすること

が要求されていて、そういうことではおとながけじめをハッキリと教えていた。

海外を回って来た人がよく日本の幼児教育の方がずっと進歩しているというし、私も同感である。

ことに最近は何種かの学会での学者の活動も盛んだし、現場の教諭や保母たちも、たとえば子どもの科学的認識を高めるための系統的な教材研究や、発達をふまえたカリキュラムについて熱心に問題を掘りさげている。日本では幼児教育といえば、マスコミもとりあげるほど人々の関心も高い現実である。

しかし、幼児教育の周辺にはいつも何か割り切れない、すっきりしないものがある。研究的、技術的には優れているはずであるのに、何か大切なものが欠けているように思う。

討論や議論はあっても、子どもの真髄に触れる面が欠けているのか、保育の中に科学性をとのかけ声を聞くと流行のようにそのことに走ってしまい、肝心の子どもが忘れられているのか。研究は研究、保育は保育と遊離している現状でもある。

いったい何のための幼児教育なのか、何を目指しているのか、自分たちの問題としてあらためて考えてみたいと思っている。

（東京英和女学院短期大学）

